

LEADERS NOW

トライアスロンで東京五輪へ

3種目すべての強さが求められる

●社会安全学部 4年次生
内田 弦大 さん

スイム、バイク、ランの順で連続して行い、着順を競い合うトライアスロンで、学生王者に君臨する内田弦大さん。ギリシャ語で3を意味する接頭辞“tri”と、競技を意味する“Athlon”の由来の通り、3種目すべてにおいて強さが求められる過酷な競技だ。日々トレーニングを積み、内田さんは2020年東京五輪出場を目指す。



内田 弦大—うちだ げんた
■1997年、滋賀県高島市生まれ。滋賀県立高島高等学校卒。幼少期から中学時代まで水泳、高校時代は陸上で全国大会に出場。関西大学1年次生の夏からトライアスロンを開始。趣味は読書。

クラスしがなく、陸上部も無かったので駅伝チームのメンバーになりました。心肺機能が強かったからか、3kmを9分20秒台で走っていましたね。高校では中長距離の選手として800mで自己ベスト1分53秒89を記録するなど、将来のトライアスロンの下地となる3年間を過ごした。関西大学入学当初は、勉強とアルバイトや友人と過ごす日々だったが、ふと「このままで良いのか」と思うようになり一念発起。1年次生の夏休みに「もう一度夢中になれることはないかと探し、トライアスロンに挑戦することにしました」と過酷な競技の一步を踏んだ。「今まで水泳や陸上の種目単体では、全国で勝つことができませんでした。でも、トライアスロンは3種目すべてで競い合うので、全国でも通用するのではないかと思います」とトライアスロンを選んだ思いを語った。

トライアスロンは、スイム1.5km、バイク40km、ラン10kmの合計51.5km(オリンピック・ディスタンス)を競う。スイムからバイク、バイクからランへと競技種目を転換する「トランジション」のタイムも競技種目について重要と言われ、一瞬たりとも気が抜けない。6月には「NITT ASTCアジアU23トライアスロン選手権」に出場。「スイムは上位で終えて、バイクで先頭集団に入ることが優勝するための鍵」との戦略通り、スイムを6位でフィニッシュしバイクへ移る狙い通りの展開も、最初の2kmで先頭集団から脱落。「良い感じでレース展開出来ましたが、バイクで一気に置き去りにされてしまって……」。その後のランでは出場選手トップの33分37秒でフィニッシュしたが、総合フィニッシュは1位から2分33秒差となる1時間48分26秒で4位に終わった。スイムとランでは本来の実力を発揮したが、経験の浅い課題のバイクでの失速に「トライアスロンは1種目でも実力が不足していたら勝てません。バイクは乗った分だけ強くなるので、更に練習に励み、バイクを強化させていきます」と誓った。その2日後にはナショナルチームの一員としてフランス合宿へと向かうハードな日々を過ごす内田さん。2020年東京五輪出場枠は最大3人の狭き門だが、「現時点では代表選出は厳しい状況ですが、もちろん東京五輪出場を狙います。自分で決めたことなので自分自身を裏切りたくないので」と鋭いまなざしで、五輪出場への意欲を語った。

厳しい練習の合間に、読書で気分転換▶



171.8cm、68kgと目立つ体格ではないが、体脂肪率は約10%。鍛え抜かれた肉体であることが服の上からでも分かる内田さん。「競技も自分もまだマイナーなので、大学の友人からは「弦ちゃん、最近ジムでも通っているの？ なんだか引き締まった体になったね」と言われますよ」と笑顔を見せた。全国52大学144人が出場

した2016年9月開催の「日本学生トライアスロン選手権」の男子の部で優勝し学生王者の座に輝くと、翌年も優勝し連覇を達成。各大会での成績が評価され、現在は2020年東京五輪出場を目指す、公益社団法人日本トライアスロン連合の強化指定選手だ。

ぜんそくの改善と体力強化のため、幼少期から始めた水泳。中学最後の夏には200m個人自由形で悲願の全国大会出場を果たした。「メンバーに恵まれた団体メドレーは全国入賞もしましたが、個人ではレベルの高さを痛感しました」。水泳ではこれ以上強くなれないと終止符を打った。一時は燃え尽き症候群に陥ったが、駅伝の合同チームの一員として出場した高島市や滋賀県の駅伝大会で好結果を残し、高島高校へ推薦入学。「うちの中学は1学年2

いぶし瓦が織り成す日本の原風景を

美しい景観を守りたい

●大栄窯業株式会社 代表取締役社長 瓦師
道上 大輔 さん —社会学部 1996年卒業—

伝統的な瓦業界で、異彩を放つ道上さん。「瓦離れ」が加速する現代において、雑貨やインテリアなど身近なモノから瓦の秘めたる魅力を発信する瓦メーカーの三代目だ。昔から続く瓦屋根が並ぶ良き日本の美しい街並みを取り戻すべく挑戦している。



いぶし瓦が映える銀色の家並と鳴門海峡が織り成す風景画のような街並み。兵庫県の淡路島南西にある海沿いの町を舞台に、日本の原風景を取り戻すべく挑み続ける瓦師がいる。淡路瓦は愛知県の三州瓦、島根県の石州瓦と並び日本三大瓦と称される。淡路島で採掘されるなめ土は、粒子が細かく、美しく仕上がるため「いぶし銀」の美しさとして定評がある。窯元の三代目として、屋根瓦のみならずコースターやゴルフパター、ヒノキと瓦が融合する椅子などで瓦の魅力を発信する道上さんは、「この業界では異端児でしょうね。瓦を使って雑貨や日用品をここまで展開したのは私ぐらいでしょうから」と柔らかな表情を見せた。



瓦の焼き上がりを目視確認

瓦に囲まれ、妹や弟と工場のベルトコンベヤーやリフトで遊んだ幼少期。「子どもの頃から瓦が好きで、家業を継ぎたいと思っていました。そのためにも一度外の世界を見て経験を積んで帰って来ようと思い、大学への進学を決めました」。関西大学社会学部に入学し、大阪で一人暮らしを始めた。ゴルフサークルに所属し、キャンパスライフを謳歌していた3年次生の1995年冬、瓦業界にも大打撃となる阪神・淡路大震災が発生した。震災後、瓦は震災がれきのイメージが付いてしまったことで風評被害も広がっていた。卒業後に損害保険会社の営業として社会経験を積み、28歳の時、瓦業界を立て直したい思いが強まり、実家に戻り家業を継いだ。「『こんな時代に瓦メーカーを継ぐ人はいない』との声を何度も耳にしましたが、祖父、父の跡を継ぐことは自然の流れでしたから」。逆風の中、会社員時代に培ったノウハウと提案力を巧みな話術で展開し、不況下にもかかわらず得意先を次々と増やしていった。

調湿・断熱効果が高く、土に還る瓦は日本の気候風土において理想の建材でもある。震災を機に淡路島の窯元は200軒から今では70軒にまで激減した。瓦の総出荷額も5分の1にまで落ち込んだが、道上さんは瓦の秘めたる魅力に夢を託した。営業が軌道に乗ると、瓦によるお洒落な雑貨やインテリアを展開する「monokawara(モノカワラ)」ブランドとして販売。業界では異例となる「グッドデザインひょうご2008・2011」、「感性価値創造ミュージアム2009」、「関西デザイン撰2011」など数々の賞に輝き、新聞・テレビなどのメディア露出も増えた。工場の一部を、空間すべてが土と瓦に包まれた“GALLERY&Café 土坐”としてギャラリーに改装し、企業の研修、講演会、観光客向けのコースター作りの体験教室などを開催する。「まずは身近なものから瓦への興味を抱いてもらいたいですね」と笑顔をのぞかせた。



季節の草花が影られた瓦コースター「瓦坐」



淡路瓦400年祭実行委員会代表、南あわじ市活性化委員を務めるなど精力的に活動する道上さんのすべての原動力は、「美しい街並みを取り戻したい」との思いから。「フランス、イタリア、スペインなど世界有数の観光地は例外なく尊厳のある歴史的な街並みになっています。京都や奈良のように、日本の景観美に瓦は欠かせません。いぶし瓦が織り成す日本の原風景を取り戻したいですね」。故郷と同じいぶし銀の輝きを放つ道上さんの挑戦はまだまだ続く。



道上 大輔—みちかみ だいすけ
■1973年兵庫県南あわじ市生まれ。兵庫県立三原高等学校(現淡路三原高等学校)卒。96年関西大学社会学部卒。損害保険会社を経て、2001年大栄窯業株式会社に入社し家業を継ぐ。「monokawara(モノカワラ)」ブランドを立ち上げるなどデザインに優れた商品を展開。趣味はゴルフ。

◀ヘッド部分に兎瓦をあしらった「瓦パター」